

大帝の剣

2007(平成19)年2月23日鑑賞(東映試写室)



監督=堤幸彦/原作=夢枕獏『大帝の剣』(エンターブレイン刊、角川文庫刊)/出演=阿部寛/長谷川京子/宮藤官九郎/黒木メイサ/竹内力/大倉孝二/六平直政/杉本彩/遠藤憲一/津川雅彦/本田博太郎/江守徹(東映配給/2006年日本映画/110分)

第7章

恐怖、戦慄、摩訶不思議

……夢枕獏原作のハチャメチャ SF 時代劇を、堤幸彦監督が好きなように料理し、「何でもあり」の世界をつくり出した。そして、それを阿部寛が面白おかしく演じ、観客はアハハと笑えばいいだけ……？ それはわかっているのだが、なかなかそうはいかないところが私の性……？ 「三種の神器」探しや土蜘蛛衆たちの「化け物退治」が「おもしろえ！」人はいいが、CG 技術と黒木メイサの美剣士ぶりだけが目の保養では、私には時間のムダ……？

オリハルコンとは……？ 三種の神器とは……？

映画の冒頭、あの江守徹の重々しい口調のナレーションが流れ、オリハルコンの意味と三種の神器の由来、そしてこの物語の骨格が語られる。まずオリハルコンとは、謎の地球外金属のこと。そしてプレスシートによると、「哲学者プラトンが『クリティアス』の中で記述した、伝説の大陸・アトランティスに存在した幻の金属」とのことだが、さて……？

次に三種の神器とは、「大帝の剣」「^{スキャンダ}闘神の独^{とっこしょ}鉛杵」「^{クルス}ゆだの十字架」の3つで、主人公万源九郎(阿部寛)が背中に背負っているのが大帝の剣。この大帝の剣はオリハルコンという謎の地球外金属でつくられたもので、同じくオリハルコンでつくられた闘神の独鉛杵とゆだの十字架を合わせて3つの神器すべてを手にした者は、世界を征服するほどの凄まじい力が手に入ると言い伝えられているもの。

そして、源九郎は亡き祖父の「三種の神器」を本来持つべき者に届けよ」という遺言を受け継いで、旅を続けているというわけだ。その源九郎は「おもしろ

え！」というのが口グセで、面白いことなら何ゴトにもチャレンジするのが生き甲斐……？

豊臣の血筋のお姫サマは……？

そんな夢枕獏原作のハチャメチャな SF 物語にもっともらしいストーリーを添えるのは、ただ1人豊臣の血筋を引くお姫サマ舞（長谷川京子）と、それを守る佐助（宮藤官九郎）やおやかた様＝真田幸村（津川雅彦）、霧の才蔵（本田博太郎）らの存在。

長谷川京子は『愛ルケ』（06年）で、色っぽい検事役を演じて注目されたが、この映画ではその美女ぶりがほとんど発揮されていないのが残念！ 逆に、SFマンガまがいの、訳のわからないランという姿を持たない宇宙人が舞姫の身体に寄生するという設定のため、奇妙な声を出しながら奇妙な演技をさせられることに……。天下の美女は、あまりこういうケツタイな演技をしない方がいいと思うのだが……。

反対勢力は……？

他方、姫と豊臣家の抹殺を狙うのが徳川とその配下の忍者たち、となればよくある時代劇のストーリー（？）になってしまうが、この映画も基本的には同じ。ただし徳川は表面に登場せず、もっぱら破顔坊（竹内力）が表舞台に……。

彼は妖怪忍者軍団“土蜘蛛衆”のボスだが、三種の神器を使って自ら中国大陸征服を企んでいるというからすごい……？ その配下の者が、権三（遠藤憲一）、手妻の籐次（大倉孝二）、黒虫（六平直政）、姫夜叉（杉本彩）たちだが、その化け物ぶりはスクリーン上でしっかりと……。『花と蛇』（04年）、『花と蛇2 パリ／静子』（05年）でものすごい SM シーンを見せた杉本彩は、温泉の中で源九郎を襲うシーンで少しだけヌード姿をサービスしてくれるから、それもお見逃しなく……。

また、宇宙人のランと対抗している宇宙人がダクシャだが、これもランと同じく姿を持たないため、彼（？）が寄生するのが権三の身体。別にこんなストーリーはいつでもいいのだが、一応参考のために……。

謎の美剣士は誰……？

この映画には、謎の美剣士として牡丹（黒木メイサ）が登場し、要所要所でその美しい姿と剣法の冴え（？）を見せてくれる。三種の神器の1つが「ゆだの十字架」とされていることに対応して、この美剣士の真の名は益田時貞、そしてまたの名が天草四郎というから、もう何でもあり……？

黒木メイサは沖縄出身の若手有望株で、『同じ月を見ている』（05年）（『シネマルーム9』179頁参照）、『カミュなんて知らない』（06年）（『シネマルーム10』164頁参照）、『着信アリ Final』（06年）（『シネマルーム11』369頁参照）と出演作は多いが、いずれも中途半端な役で私は大いに心配しているもの。それに続く『ただ、君を愛してる』（06年）の評論で、私は「やはり黒木メイサの立場は微妙。こんな中途半端な役に甘んじることなく、彼女には近い将来主役を張ってもらいたいものだが……」と書いた（『シネマルーム11』272頁参照）が、それはこの『大帝の剣』でも同じ。

1988年生まれとまだ若い美女だから、20歳過ぎには主役を張って一皮むけてもらいたいものだが……。

アクションは今ひとつ……？ 源九郎ってホントに強い……？

大帝の剣は、アレキサンダー大王がヨーロッパを制圧する力になったという剣だが、とにかくデカくて重そう。源九郎はいつもそれを背負っているのだが、下端相手にそんな大剣を使う必要はないらしく、権三や破顔坊と対決する時だけ大剣を使用することになるが、どうもそのアクションの迫力は今ひとつ……？

しかも、手妻の籐次の放つ猛毒の吹き矢が刺されると、「俺にはそんなものは効かねえ！」と言いながら反撃するものの、効きが遅いだけだったようで、もろくも倒れてしまったから期待外れ……？

しかもクライマックスとなる破顔坊との対決においても、背中から破顔坊の「鬼のツメ（?）」でグサリと突き刺されて一巻の終わりとなりかけたから、一体どうなっているの……？ 毒を自らの口で吸い上げるという舞姫の献身的な努力や、すばしっこいフットワークで破顔坊を走り回らせるという佐助の助けがなけ

れば、破顔坊をやっつけることが難しかったことを考えれば、源九郎ってホントに強い、と思わざるをえないが……？

そんな源九郎を阿部寛が軽妙に演じ、『トリック劇場版』（02年）、『トリック劇場版2』（06年）で彼と息の合ったコンビを見せる堤幸彦監督がうまく演出しているが、所詮それだけ……？

見どころはCGだけ……？

こんなハチャメチャSF時代劇については、あまり真面目に評論を書いても仕方がないが、ふんだんに使われているCGのバカバカしさと美しさについてだけひと言……。

土蜘蛛衆たちのケバさやキャラは、『忍 SHINOBI』（05年）に登場していた数々の忍者たち（『シネマルーム9』162頁参照）とよく似たようなものだが、あまり見栄えのいいものではない。

しかし、映画冒頭の宇宙船同士の闘いや、ラストシーンにおける、異国の地でラクダに乗った舞姫を源九郎と佐助が守りながら雪の中を進むシーンは、それなりに美しく工夫されたもの……？ さらに、三種の神器を源九郎、佐助、舞姫の3人が使って破顔坊をやっつけるシーンでは、三角形に結ばれた三種の神器による美しい光の輪が印象的……？

まあ、黒木メイサの美しさとともに、そんなCGの美しさがこの映画の唯一のお楽しみ……？

2007(平成19)年2月24日記